

死者のパラーから生者のリビングルームへ： 近代アメリカにおける居住空間の変容

黒沢 眞里子*

はじめに

かつて、家（特に洋風の）には滅多に使われない部屋があった。通常玄関を入ってすぐの「応接間」や「客間」と呼ばれたその部屋には、ソファやテーブルが置かれ、壁には絵が飾ってあったりする。子供は希にしか入れず、突然の来客にもまごつかないよう常に整えられていた。戦後間も無く建てられた筆者の生家（洋風住宅）にも、玄関を入って直ぐ左、南側に面した応接間があり、家族は「洋間」と読んでいた。この部屋だけ板張りの洋風の部屋だったからだ。日本住宅史によると、明治維新以降上層住宅に隣接して接客の場として建てられた洋風の建物が、その後中流都市住宅にまで広がり、明治30年頃から洋風応接間が出現したという¹。上層階級の接客の場が応接間として庶民にまで普及したということだ。実家の応接間はめったに使われなかったが、家族の誇りのような存在であった。しかし、時代の変化、特に家族観の移り変わりによって、使用頻度の少ない応接間は無用なものと考えられるようになり、それにとって代わり、「茶の間」（和風住宅）や「居間」（洋風住宅）が脚光を浴びるようになった。「客間の左遷」なる言葉まで登場するようになる²。

西洋にも同じような部屋が存在し、同じような変化を体験した。日本の

*専修大学文学部教授

応接間は住居の近代化の過程で西洋の影響を受けて生じたものであるから、そのルーツとも言える部屋である。「パーラー」と呼ばれるその部屋は、ヴィクトリアン・アメリカの中産階級の家族が多く的情熱・金銭を注ぐ対象であった。日常の「必要性」から造られた部屋でなく、結婚式や葬儀、祝祭日を祝う特別な行事以外ほとんど使われなかった。「パーラー」の起源は、社会のエリート層のサロンや前世紀の中産階級の“best room”（応接間）にたどることができる³。

“Parlor”の語源を見ると、およそ1200年頃の *parlur* すなわち「告解を行う窓」や「外部者と会話をする修道院の部屋」を意味する語から生じており、これはもともと *parler*（「話す」）から派生した古フランス語 *parleor*（「法廷」、「裁判の部屋」、「公会堂」などの意味）という語に由来している（12世紀の近代フランス語では *parloir* と表記した）。「私的な会話をする居間」という意味は14世紀に現れ、「ビジネスのショールーム」（アイスクリーム・パーラーのような）の意味で最初に記録されているのは1884年とある⁴。

19世紀末になると、「無用な」パーラーに変わって新たに「リビングルーム」が家族生活の中心として存在感を増してくる。パーラーの凋落とリビングルームの台頭——日本では「応接間」から「茶の間」あるいは「居間」への変化——は、どのような文化的文脈の中で生じたものだろうか。これまでアメリカにおけるこの変化を論じた研究はいくつかあり、興味深い文化的・社会的背景の考察がなされている。本論では、これらの研究に依拠しながら、2つの視点を加える。一つは大きな文脈として、葬儀史の視点からこの変化をパーラーが担っていた機能の一つ（葬儀）を住居の外部に移動させ、専門家の手に委ねる（*funeral parlor*）過程として捉える。「死者」が「リビング」（*the living*）、文字通り「生者」に屈して、住居はますます「生者」にとって居心地の良い、「死者」を排した家族の私空間となっていくプロセスである。もう一つの視点として、明るい、リラック

スしたリビングルーム創出に日本の影響がうかがえる点を考えたい。格式張ったパーラーの凋落に貢献したのは、カリフォルニアで生まれ全米に広がったバンガロー・ハウスであった。この点を最後に考察する。

パーラー

マテリアル・カルチャーの研究者トーマス・J・シュレレスによると、アメリカにおいてパーラーやある種の「ベスト・ルーム」は、社会階層や経済状態、地理的ロケーションに関係なく存在するという⁵。移民家族の主婦は家を建てる時、結婚や通夜、牧師の訪問、祝祭日など家族の特別な行事を行うスペースを確保しようとしたからだ。パーラーには写真や様々なモノが飾られ、パーラーはさながら「家族のミュージアム」⁶のような働きをした。写真は家族の歴史を語り、置物や絵は消費者としての趣味の良さを伝え、家族のアイデンティティが示される部屋だった。

パーラーは、どちらかと言えばアメリカ的な言葉で、イギリスでは、“drawing room”がよく使われた。例えば、プルマン社の列車「パーラーカー」はイギリスでは「ドローイングルーム・カー」と呼ばれた。部屋の雰囲気も、イギリスのドローイングルームの方がエレガントで落ち着いていた⁷。ドローイングルームとはそもそも紳士淑女の夕食会の後に、喫煙をする男性陣とは別の部屋に女性たちが引き下がり（withdraw）、上品な会話を楽しむ部屋であった。裕福な家でドローイングルームがある場合には、通常奥まった場所、ダイニングルームの隣にあった。一方、パーラーは通常家の前方、人の出入りのある入り口近くに置かれた。訪問者は、都市部では特に、玄関でパーラーに通すかどうか、まず判断が下され、ふさわしい人物だけがパーラーに招き入れられた。

暖炉の周りは伝統的に会話の場であったが、中産階級のパーラーにも富裕層のドローイングルームほど立派ではないが暖炉が設けられた。中産階

級の「暖炉ブーム」が起こったのは、実用的なセントラルヒーティングの普及が引き金となった。といっても、昔の暖炉生活に戻るといっても、本物の火に頓着しない彼らは、人工の薪やガスもすすんで取り入れた⁸。その方が便利で実用的だったからだ。新しい技術は、それによって失われるものへのノスタルジア、感傷を生むものだが、失われたものを再現する場合実物にこだわらず文化的記号で間に合わせることはよくあることだ。

ヴィクトリア朝時代のパーラーは「家の顔」と呼ばれたように全体の印象が最初に決まる部屋であった。どのような家族が住んでいるのか、彼らの趣味や社会的身分・品格・人柄 (character) さえ判断された⁹。人格形成にも陶冶が必要のように、部屋づくりにも自己統制が求められる。したがって、パーラーもリラックスした「居心地よさ」より「厳格さ」が求められた。その結果、パーラーはどちらかというとき暗いイメージが持たれた。ヴィクトリア文化の慣習やエチケットがいかに忠実に守られているか、家族の人格を示す「舞台」としてのパーラーは他のプライベートな空間から厳格な仕切りで隔てられていた。

この堅い道徳的厳格さ、「葬式」のような暗さも19世紀後半にはすでに批判され、世紀末にはパーラーの終焉が始まっていた。その変化は段階的に生じ、まずは、他の部屋から厳格に分けられていたドアが壁に収まるスライド式の仕切りとなり、アーチの開口部やカーテンへと変化した¹⁰。さらには、過剰な装飾が施されるようになり、徐々に明るく「くつろいだ」雰囲気に変化する。それは、パーラーの一部に「コージーコーナー」と呼ばれる小空間が侵入することが引き金となった。部屋の装飾品に触れることも、椅子に気軽に座ることも許されなかつたかつての「墓地のようなパーラー」(grave-yard parlor)¹¹には、背もたれ、肘掛のない長椅子 (divan) が部屋の壁際に置かれ、その上にはレールが張られてバクダッド風のドレープが施され、長椅子の上にはたくさんのクッションが置かれた。さらには、日本、インド、トルコ、エジプトなどの異国情緒溢れる装飾がなされ¹²、

エキゾチズムが人々を堅苦しさから、自由でのびのびとした生活様式へと解放した。柔らかいクッションなどが取り入れられたパーラーは、「触れること」がはばかれた堅い部屋から、触覚も喜ぶ感覚空間へと変容し、「厳格な慣習が」支配する古いパーラーは徐々に瓦解していった。パーラーのこのような変化は、リビングルーム台頭への序奏であった。

パーラーからリビングルームへの変化を、“character”から“personality”への変化として説明したのが歴史家カレン・ハルツネンである。ハルツネンは、リビングルームがパーラーに取って変わる19世紀末は、“character”に変わって“personality”が自己表現の重要な概念として登場する時期と重なっていたとし、新たに登場した社会空間と自己認識との関係を、「パーラー」から「リビングルーム」への変化と関連づけて考察している¹³。つまり、ヴィクトリア朝時代のパーラーが“character”を示す場であったものが、20世紀初頭のリビングルームでは、“personality,” 個性を重視する場へと変化したという。1900年から1930年に現れた「個性的な部屋づくり」(personal decorating) は家庭にあるモノに新たな意味解釈を与える試みであり、それが20世紀の大量消費社会の登場に欠かせないものであったと述べている。

パーラー消滅を嘆く声

アメリカの住宅からパーラーが消える現象を「パーラレス国家(国民)」(parlorless nation) と大げさな言葉を使って嘆く声が雑誌に登場した。「主婦の感想—パーラーを廃すること—」と題された1915年の『ハウス・ビューティフル』誌の記事では、筆者のリリアン・ハート・トライオン(1870年生まれの45歳)は、路面電車の中でさりげなく聞こえてきた農夫の興味深い会話に耳を傾けるという場面から書き起こしている。というのも、いかにも戸外労働者風の男性は彼女の関心事である建物の話をしており、そ

れが最も進んだ考え方だったからだ¹⁴。どうも、見晴らしの良い自宅を手放し、子育てに十分な広さの家に移ったらしい。それは革新的なバンガロースタイルの家で、1階にはダイニングルームとキッチンに加え、レセプションホール、リビングルーム、それに書斎（den）があるという。これを聞いて著者が嘆くのは、パーラーやシティングルームがないことだ。それなくして男性は家でどのように過ごすというのか。彼女は想像してみる。吊りランプの下、赤いテーブルクロスのかかったテーブルの横でロッキングチェアに座る男性の姿、しかしリビングルームはこの男性の人格（character）にはどうにも合わないという。

安息日の非日常としてのパーラー

記事を書いたトライオンが思い出すのは、祖母の田舎の厳格で威厳のあるパーラーだった。ドアを開けたときすっと鼻を突くあの独特な、かすかにカビ臭い匂い、中を神秘的に見せる薄暗い照明など、誰にとっても決して忘れられないパーラーの思い出だ。中央にはテーブルがあり、その上には手編みのレースとランプ、角がきちんと揃えられた本、子供でさえ説明できる家族の思い出の品々等だ。椅子は、子供が座っても跳ね返されそうな堅いスプリングで、マントルピースの上には、置き時計と一對の花瓶、その中には干からびたドライフラワーなど、この部屋に忍び込んだ子供の記憶に刻まれたパーラーのモノの数々だ。

日曜日や来客時、お茶会などにはパーラーの扉が開かれ、閉ざされていた部屋に現実が取り込まれる。トライオンが思い出すのは、大伯母のパーラーで繰り広げられた親戚の人々との交流の情景だ。その光景は日常の親密さとは異なり、人々は晴れ着をまとい、声も仕草さもエレガントになり、品のある会話が聞こえるような、人々が「かしこまる」姿だった。パーラーは人の気高さを引き出す舞台であった。トライオンは親戚の人たちの偉

大きさをパーラーで発見したという。日常の付き合いでは見過ごされてしまう人格の一面をパーラーは演じさせ、身近ではあるが特別な舞台となっていたというわけだ。このような機能、例えるなら安息日の非日常性を空間の中に創り出す役割が、パーラーを国民にとって重要な部屋とさえ言わしめたのだらう。

パーラーの変化

しかしながら、時代の変化とともにパーラーのフォーマルな家具も、徐々に買い足された家の家具と合わなくなり、また同じようなデザインの家具を手に入れるのも難しくなり、パーラーの古い家具は屋根裏や倉庫に移動させられる運命となった。トライオンはこの変化を“luxurious,” “formal”から“gay,” “friendly”への変化であるとし、その変化は「美」と関わる審美的嗜好が原因というよりも、“ease”と“intimacy”を好む社会変化であると説明している。婦人たちは、パーラーを、夕べに家族や友人たちとくつろぐ場と考えるようになり、コージーコーナーを造って小物で飾り、ミルクスツールを持ち込むようになった。さらにプロのデコレーターの登場とアドバイスで、パーラーはますます進化して、単なるゲストを迎えるだけの部屋から家族の“character”や“taste”を表現する場となった。完成の域に達したその時点でパーラーは完全に廃止されてしまうのか、自分たちの好みに合わせることができるようになった途端お払い箱となるのか、と著者トライオンは問う。「パーラーのない国」に急速に向かっており、それを加速しているのは、現代生活に伴う限られたスペースや使用人のいない生活、建築費用の高騰、そしてシンプルな住居を好む考え方などであるという。この傾向は賃貸住居から始まり、バンガローが助長した。その結果、かつて家の中でもっとも重視されていたパーラーは今や眺望の悪い、寒い方角に追いやられた。さしずめ、「居間の左遷」といったとこ

ろだ。

男性の居場所へ

とはいえ、著者はこのような状況でパーラーを取り戻せるとは思っていない。「私たち自身が変わってしまったから」、「リビングルームは社会の新たな感覚に込んでいる」からだ。リビングルームは親密な空間を提供し、人々はくつろいだ雰囲気の中で実のある会話を楽しめる。最大の利点は、と著者が言うのは、女性のパーラーとは異なり、リビングルームは女性だけでなく男性もリラックスできる部屋でもあることだ。女権拡張運動の時代、男性も家で正当な真価が認められた。パーラーはもともと女性の領分と考えられていたので、男性がパーラーに入る時はプレッシャーを感じ、何かしら口実を見つけて早々と退散したいと思う部屋だった。リビングルームの色はソフトで、照明も程よく、椅子は座り心地が良い。そこでは男性は日常モードの中で自尊心を保つことができるようになった。プロのデコレーターの出現のお陰で、部屋のアレンジが女性だけの仕事とは思われなくなったことも男性に開かれたリビングルームに寄与した。

“school of politeness”は“manner”に、“conversation”は“talk”に

パーラーからリビングルームへの変化を著者は、「リビングルームがパーラーになることでもある」ととらえ、この新しい習慣はすぐに受け入れられるようになるだろうと述べている。何が変化したかという点、「礼儀正しさやかしまった会話を学ぶ場」（“school of politeness and conversation”）から、「マナーとおしゃべり」（“manner and talk”）の世界になったという。このようにしてリビングルームは家族生活の中心となるだけでなく、かつてのパーラーがそうであったように、親密な家族の聖域を外界

から守る、見えないバリアとしても機能するのだと記事を締めくくっている。

リビングルーム

パーラーが変化するきっかけとなったコージーコーナーが登場する1890年代、より大きな変化が中産階級の居住空間に生じていたことがトライオンの記事は明らかにしている。それはいわばコージーコーナーが家のフロント部分全体に広げられた現象としての、リビングルームの登場であった¹⁵。このようにして、リビングルームはパーラーに取って代わり、家の前側に位置する最も広い部屋となる。それに伴い、前述したように、スライド式ドアや、移動式スクリーンなどで、それまで厳密に分けられていた各部屋がお互いにオープンになり、家の空間が一つに繋がるようになった。

このような変化——プライバシーを重視し、機能によって仕切られたヴィクトリア朝時代の家から開放的な20世紀の家へ——をよく表しているのは、玄関ドアを入れて直ぐリビングルームが始まるレイアウトである。現代のアメリカ映画やテレビドラマを見ていると、入り口のドアを開けると直ぐ部屋という光景をよく目にする。犯罪も多いアメリカ社会で何の緩衝地帯もおかず即部屋につながることに、しかも頑丈とは程遠い華奢なドア一枚を隔ててということに大きな違和感を感じるものだ。現代ではよく見られるこのレイアウトは、パーラーからリビングルームへの変化と時代を同じくして誕生したものである。中産階級の社会生活の性質が大きく変化したことによる。その変化の要因として指摘される一つはサマーハウスの流行であり、もう一つは、トライオンの記事でも言及されていたバンガロースタイルの住居であり、これに日本の影響が見られる。暗いパーラーから明るいリビングルームへの変化の過程にどうも日本の影響があったようだ。このことを念頭に、まず、サマーハウスの流行、次にバンガローを見

ていく。

1880年代、90年代サマーハウスが流行し、『レディース・ホーム・ジャーナル』誌は度々、納屋や家畜小屋を改造してサマーハウスにする提案を行っている。このようなサマーハウスは、建物の性格上入口からすぐリビングルームが始まるものだった。カントリーハウス風のプランではピアザ(piazza)と呼ばれる屋根付きポーチが重視され、ソフトなムードを出すために、籐のテーブルや長椅子、ラグ、飾りのカーテン、そしてそこに日本のちょうちんも使われた。ピクニックなどの戸外活動ともあいまって、堅苦しいパーラーでのパーティーとは対照的な、アウトドアでの飾らない集まりが流行となったという¹⁶。戸外生活の流行の文脈の中で見てみると、いわば屋根付きポーチは「パーラー」に、近くの林は「リビングルーム」になったということらしい。これが可能になったのも、そこで付き合う人々が同質的な社会階層に属するために、玄関ホールで、パーラーに招き入れるべき人物か否か判断する必要がなかったこともその背景にあった。

サマーハウスの影響はそれが購入できる富裕層に限られていたが、ヴィクトリア朝時代後期のアメリカ人中産階級に、より重要な影響を与えたのは郊外住宅地の発展であった。それを後押ししたのが、通勤鉄道の発展と1888年以降登場する路面電車であった。1840年代、50年代の郊外は小さな街を目指していたが、1890年になると郊外のイメージは都市とはまったく異なるものとなった。郊外住宅地では収入によって住む場所が限定されていたので、中産階級の「礼儀作法」(decorum)や「上品さ」(gentility)が強化されることになる。このようにして郊外の社会生活は、外部者を警戒せずに、また社会的地位を誇示する必要も減り、時代は「インフォーマルな時代」へと加速する。郊外での一戸建ての生活は、個人のプライバシーが確保されるイメージが強いが、より大きな社会生活の文脈の中で見ると、住民相互の社会監視メカニズムが働いている事実は見過ごされやすい¹⁷。

このようにして、パーラーへのフォーマルな訪問は、結婚式や葬式に限

られるようになった。新たな習慣として登場するのは、アフタヌーン・ティーやソーシャル・ブレックファースト、レディース・ランチなど堅苦しくない集まりである。時代が求めていたのは、数名の親しい友人たちで、このようにしてアメリカ人はあっという間に「パーラレス国民」になっていった。

家の外に出たパーラー、フューネラル・パーラーの普及

アメリカからほんとうにパーラーはなくなってしまったのか、アメリカ人はパーラレス国民になってしまうのか。実は、パーラーは家から追放されても生き延びていた。パーラーがもっていた一機能——葬儀——が業者の手による「フューネラル・パーラー」とし生まれ変わるからである。もともと自宅で行われていた葬儀が専門の葬儀施設へと移る変化は、19世紀末から見られ、現代の独立した専門の「フューネラル・ハウス」につながっている。とはいえ、現代の施設との間にはギャップがある。最初は葬儀業者の事務所や通常の住宅が使われ、自宅での葬儀を印象付けるために「パーラー」という言葉が使われ強調された¹⁸。現代の「フューネラル・ハウス」はそのような「家庭的な雰囲気」は強調せず、快適な空調設備など実用的な側面が重視される。住宅史の文脈では堅苦しきの衰退期に、葬儀史の文脈ではプロフェッショナル化への過渡期に、「パーラー」が使われたことは象徴的で示唆に富む。

現在までほとんど唯一の包括的葬儀史であるロバート・ハーベンスティンとウィリアム・レイマーズ著『アメリカの葬儀史』によると、フューネラル・ホーム誕生の要因は3つの機能——クリニック、家、チャペル——が一つに合体したことによる。つまり、遺体のエンバーミング処理、都市部の限られた住宅スペース、遺体と会葬者の宗教施設までの移動手段などの問題に対処するための「必要性」が「フューネラル・パーラー」を生ん

だと説明されている。しかし、ジェームズ・J・ファレルによると、このどのニーズもフューネラル・ハウス普及の複雑な条件を説明しないという¹⁹。ファレルが指摘するのは、葬儀の機会が減り、住宅そのものが「死者」をまったく考慮しない、生者中心になった事実である。例えば、棺も通れないドアの仕様などである。クリニック、家、チャペルより重要な要因、つまり、今まで述べてきたような住宅をめぐる人々の意識、特に「生者」中心のライフスタイルの変化がフューネラル・ホームを誕生させたということだ。

ファレルによると、レセプションオフィス、トイレットルーム、トリミングルーム、ショールーム、ヴォールト、ラボラトリー、職員のスリーピングルームなど総合的な設備を備えたフューネラル・ホームが全米各地で見られるようになるのは1885年以降である²⁰。最初はカリフォルニア州に集中していたが、それを全米に普及させたのはフューネラル・ディレクターの努力だった。ビジネスを増やす機会もあり、スケールメリットから経営効率も高まり、低価格で立派な葬儀を提供することが可能になったからである。フューネラル・ホームは業者、消費者両方を満足させる形で普及していった²¹。

フューネラル・パーラーは明るく、心地よく

パーラーが葬儀施設として生き残ったにせよ、本来持っていた「フューネラルな雰囲気」は必ずしも保持されたわけではなかった。フューネラル・ハウスの利用を高めるために、フューネラル・ディレクター達は、葬儀ビジネスの場を「できるだけ明るく、心地よく」しようとしたからだ²²。ここでも、古いパーラーは、少なくともその雰囲気は、消える運命だったといわざるをえない。陰鬱な印象を取り除くために、ショーウィンドウから棺が取り除かれ、代わりに花や植木が置かれた。レセプションルームと

ショーウィンドウとの間に仕切りを設け、客と最初に会うときに、死に関連するものが目に入らないよう注意を払った。インテリアには時代の流行さえ取り入れた。とはいえ、「パーラー」は鍵言葉となり、「フューネラル・パーラー」なる言葉が生まれる。新しいタイプの葬儀施設が登場するまでの初期段階では、家庭で執り行う葬儀との連続性が強調されたからである。しかし、ことは単純には進まない。ここにひねりが生じていたことを学際的アメリカ研究者ファレルは見落とさなかった。パーラーはかつて住居という私空間の中に残る「最後の公空間」、親密さに抗する砦であったものが、家から追放されてフューネラル・パーラーに取り込まれると、本来の「公共性」ではなく、それと対極の「家庭的な居心地良さ」(homeliness)が訴求されたからである。なんという皮肉だろう。伝統的パーラーは結局は現代社会から消え去る運命だったのか。

必ずしもそうとは言い切れず、葬儀業界はパーラーのみならず、歴史的建造物さえも意図せずに保存する役割を担ったことが、住宅型フューネラル・ハウスを研究した博士論文によって明らかにされている。「自宅のように一住宅型フューネラル・ホームとアメリカの変化するヴァナキュラー・ランドスケープ, 1910-1960—」(2013年)と題された論文では、葬儀史で見過ごされがちな建築というマテリアル・カルチャーに注目し、自宅の葬儀から外部の葬儀施設への移行が意図せずに歴史的建造物の保存に貢献したと興味深い指摘をしている²³。第一次大戦後くらいから、市街地から郊外へと葬儀施設の移動が始まり、その際に、住宅地の立派な古い邸宅(mansions)が購入され、フューネラル・パーラーへとして再利用された。立派な屋敷に目をつけたのは、ひとつには、社会的地位を上げるべくプロフェッショナル化を進めていたフューネラル・ディレクターにふさわしい場をアピールするためであった。利用者に立派な葬儀を希望させることや専門施設への移行を促す意図ももちろんあった。何れにせよ、葬儀業界の専門化を押しすすめる中で、意図せずに、後に歴史建造物保護団体が保存

に尽力するような建物が保存され、再利用されたということだ。

パーラーのリビングルーム化に与えた日本の影響

パーラーのリビングルーム化について述べてきたが、最後に日本の影響について考えたい。アメリカの建築における日本の影響について研究したクレイ・ランカスターによると、堅いイメージのアメリカのパーラーをリラックスしたリビングルームに変える上で、日本のインテリアが大きな影響を与えたという²⁴。クレイは先にあげた1915年の『ハウス・ビューティフル』誌の記事を引用し、新しいバンガロースタイルの住居がパーラー消滅に寄与したことに日本の影響をみる。

バンガロースタイルとは、19世紀末にカリフォルニア州に誕生した住宅スタイルである。住宅建築で最先端を走り、常に新規性を求めるカリフォルニアの土地柄と、退職者の移住先としてのニーズが生んだこのスタイルは、「絶対必要な部屋数以上」は造らず、「屋根裏や二階、地下」はなく、その特徴は「シンプルな水平のライン、軒の深い屋根、多数の窓、広いポーチ（2箇所の場合も）、簡素を極めた木造建築」が特徴だった²⁵。クレイの説明によると、英語の“bungalow”は17世紀末頃からイギリスで使われていたインドの簡素な住居を意味する言葉で、のちにインド政府によって建てられた隊商宿や旅行者の簡易宿を指すようになった。とはいえ、カリフォルニアのバンガローはインドのバンガローと物理的な繋がりがあ
るわけではなく、厳しい寒さから自由であるという似通った気候条件が共通項であった。むしろ、バンガロー誕生・普及には2つの人的要因が重要とし、一つは、居住者が住居としてのほぼ最低限を満たすことで満足したことと、もう一つは、設計者や建設業者の側が、独自性・芸術性がありながらも廉価なモデルを求めていたことによる²⁶。

カリフォルニア・バンガローの起源は、少ない資金でカリフォルニアに

移住した人々が将来の投資として若い果樹園を購入し、後に納屋にするつもりで小屋を建てたことが始まりという。小屋とはいえ、東部の堅固な建築様式を踏襲し、太い柱と梁などを用い、家畜房などが設けられた。麻袋を使って内装をし、簡素な炉辺も造られ、たる木の影が床に差す心地よいリビングルームが出来上がった。納屋のドアは大きく開け放たれていることが多く、戸外との一体感がアウトドア志向の人たちを喜ばせた。元々は仮の住居であったものが、広いベランダも加えられ、納屋兼住居の良さが認められると、バンガローという名前（当時の雑誌記事によると遠方からやってきた旅行者がインドのバンガローと似ていたのを命名したとされる）とともに、最初から住居を目的としてバンガロー・ハウスが建てられるようになった²⁷。

バンガローがインドの簡易宿舎を連想させた初期の段階からさらに飛躍・発展するきっかけとなったのは、建築の自由な発想を求め、この簡易な建築方法に注目したチャールズ・サムナー・グリーンとヘンリー・メイヤー・グリーンの兄弟だった。彼らはカリフォルニア州のパサデナに設計事務所を開設していた。彼らの最初のバンガロー・ハウスは、パサデナに建設したU字型のバンディニ・バンガロー（Arturo Bandini 施主）である。U字型の開口部には目隠しのパーゴラを配したデザインで、工事はシンプル、安価であった。セコイア材のボードを立ち上げ、接合部分には巾木を用いた簡素な造りであった（ボードを垂直に立ち上げる工法をバンガローに最初に採用したのはこの兄弟）。U字型の底の部分にリビングとダイニングルームが置かれている。縦長の二部屋は、折りたたみ式の仕切りを開けると、一つの広いホールとなる。U字型住宅のデザインは、スペイン植民地時代の建物にヒントを得たようにも思われるが、厚い土壁の閉鎖的な重い雰囲気にはなっていない。この開放的な軽さを生む建て方こそ日本の影響であるとクレイは指摘する²⁸。グリーン兄弟が日本の建築に触れたのは、1893年シカゴで開催されたコロンビア博覧会と、翌年サンフランシス

コで開かれたミッドウィンター博覧会で訪れた日本館であった。日本の展示に強い関心を持ち、その後写真の収集も始め、グリーン兄弟の設計に日本の影響が顕著になるのは、1906年以降であるという。

バンガロースタイルはその後全米に広がるが、東南アジアと結びついた名称から離れ、バンガローはますます日本の建物に近くなっていった。1906年に書かれた記事によると、「アメリカのバンガローは、熱帯の国々で建てられた建物というよりも、より多くを日本のモデルに由来していることをわれわれは知っている……それはカリフォルニアの気候下できわめて人気のあるタイプで、国のどの場所よりもカリフォルニアでより多く、より優れたバンガローが建てられている。」²⁹ アメリカの建築といえば高層ビルが思い浮かび、そのドラマチックな陰に隠れてしまいがちだが、バンガローもきわめてアメリカらしい住居タイプで、何世代にも渡って多くの人々に住まいを提供してきたとクレイは指摘する。高層ビルがアメリカの起業家精神を表現するとすれば、バンガローは、飾らない普通の家のシンボルである。建築的細部にこだわることもなく、インフォーマルに設計されたバンガローは、ラグジャリーよりも居心地良さと利便性を提供し、普通の、健全な、協力的でお互いをいたわる家族生活を重視する住居である、とクレイはバンガローと日本の影響を論じた章を締めくくっている³⁰。

おわりに

パーラーからリビングルームへの変化の根本にあるものを、住居環境やライフスタイルの変化から見てきたが、葬儀史の文脈を加えると、リビングルームの用語が示すとおり、生者（リビング）のための、部屋・住居造りに向かう変化と捉えられることを示した。家の中から余計な（と思われる）空間を排除する傾向——パーラーや玄関ホールなど——は、家から「儀式的な公空間」を排除することを意味する。玄関ホールは、家と外、公か

ら私へと移行させる文字通り敷居であったが、そのような儀式的なスペースを必要としない同質的な郊外住宅地がアメリカで発展したことが、その背景にあった。その先駆けとなったものが、農家の納屋などを利用したサマーハウスであり、日本の影響を受けたバンガローであった。堅苦しさから解放された住居が一気に屋外との関係（自然との一体感）に向かったことは、やはりアメリカ人（とくにアングロ・サクソン系の）の自然志向が根底にあったのではないだろうか。

家から追放されたパーラーは、葬儀ビジネスの場に移行するが、堅苦しい雰囲気というよりも家庭的な雰囲気が訴求されたというひねりはあったものの、新たなライフスタイルに合わせて改造されつつあった住宅環境の中で、意図せずに、古い住宅を保存する効果があったことも分かった。これは墓地に関してもいえることで、植民地時代の古い墓地は、周りの地形が変化する中、昔の地形を保持し、また19世紀の広大な田園墓地は、すでに失われたかつての植生を保存する場としても注目されている所以である。このように考えると、「死」は変転する「生」の世界の中で、時間・変化とは無縁の空間を創り出す役割を意図せずに果たしていると改めて認識させられた。

注

- 1 平井聖『日本住宅の歴史』（NHK ブックス、1974年）、p. 176.
- 2 Ibid., p. 183に引用。
- 3 Katherine C. Grier, *Culture & Comfort: Parlor Making and Middle-Class Identity, 1850-1930* (Washington D.C.: Smithsonian Books, 2010), p. vii.
- 4 *Oxford English Dictionary*, 1989, “parlor” の項目。
- 5 Thomas J. Schlereth, *Victorian America: Transformation in Everyday Life, 1876-1915* (New York; Harper Collins Publishers, 1991), p. 119
- 6 Ibid.
- 7 Ned Stuckey- French, *The American Essay in the American Century* (Columbia: University of Missouri Press, 2011), p. 56.
- 8 Schlereth, p. 122.

- 9 Karen Halttunen, "From Parlor to Living Room: Domestic Space, Interior Decoration, and the Culture of Personality," in Simon J. Bronner ed., *Consuming Visions: Accumulation and Display of Goods in America, 1880–1920* (New York: W. W. Norton & Company, 1989), p. 160.
- 10 Stuckey-French, p. 58.
- 11 Clarence Cook, *The House Beautiful* (New York: Dover Publications, Inc., 1995), reprint of the 1881 Charles Scribner's Sons edition, p. 277.
- 12 Halttunen, p. 165.
- 13 Ibid, p. 158.
- 14 Lillian Hart Tryon, "Reflections of a Housewife: On Abolishing the Parlor," in *The House Beautiful*, June 1915, p. 12.
- 15 Ibid, p. 165.
- 16 Ibid., p. 167.
- 17 Ibid., p. 169.
- 18 Robert W. Habenstein, William M. Lamers, *The History of American Funeral Directing* (Milwaukee, WI: Bulfin Printers, Inc., 1955), p. 574.
- 19 James J. Farrell, *Inventing the American Way of Death: 1830–1920* (Philadelphia: Temple University Press, 1980), p. 173.
- 20 Ibid., p. 174.
- 21 Ibid.
- 22 Ibid.
- 23 Dean George Lampros, "Like a Home: The Residential Funeral Home and America's Changing Vernacular Landscape, 1910–1960," 2013 dissertation submitted to Boston University, p. 1.
- 24 Clay Lancaster, *The Japanese Influence in America* (New York: Abbeville Press, 1983), p. 219.
- 25 Ibid., p. 104.
- 26 Ibid., pp. 104–5.
- 27 Ibid., p. 105.
- 28 Ibid., p. 109.
- 29 Ibid., p. 122に引用.
- 30 Ibid., Chapter 11 "Japanese Contributions to the Development of the California Bungalow." 本節は、この章を中心にまとめた。